スタッフルーム
Staff room

世界はだんだんよくなっている

田谷（たや）　祐子（ゆうこ）
（日吉メディアセンターパブリックサービス担当）

大学職員として入職したその日，ながくお勤めの方のお話をたくさん聴いた。その中に，なんとなく忘れられずにいる言葉がある。曰く，「学生のことが好きでなければ大学職員は務まらない。好きになれないのであれば辞めた方がいい」。

教育機関とはいえ，大学というところには学生との関わりがほとんどないような部署も多いのであるから，その言葉は深い意味を示すものではなく単なる叱咤激励のひとつの形であったのかもしれない（あるいは，学生というのが一例に過ぎず，事務員はすべてのサービス対象を好いているべきである，という意味だった可能性も否めないが）。それでも，日吉という初々しい学生たちの会するキャンパスの図書館員となり，学生と言葉を交わさない日がほとんどないような毎日を過ごすなかで，時折，考えるのである。自分は学生を好きなのだろうか。

大学時代，「ワンチャン」という言い回しが流行していた。キャンパスの中庭を歩いていても，SNSを覗いても，いたるところでこの台詞とすれ違った。念のため解説をいれると，「ワンチャン」とは「one chance」の略であり，用法としては以下のようになる。「なるはやでいけばワンチャンあるんじゃね（なるべく早く対処をすれば状況を打開できる可能性があるかもしれませんよ）」。自分はといえば，こうした言辞が飛び交うような共同体に馴染めず，おそらく誕生日を迎えたのであろう友人を囲んで中庭で上機嫌に歌っているような学生たちを心底うるさいなと思っているような質であった。一方で，「ゼロベースからセルフブランディングで結果にコミット」みたいなことを口にしていそうな「意識高い系」とは接触する機会さえなく，騒がしく華やかな学生に対してどこか冷ややかな，自分と同じような友人たちとばかり，ひっそりと本や映画の話をしていた。問題は，そういう自分が社会人になった途端，どんな種類の学生もひっくるめて好きになれるのかということである。

学生であった時分よりもずっと注意深く学生を観察するようになった。その対象はアルバイトやボランティアとして図書館に出入りする子たちであり，毎日同じ席につき熱心にノートを開いている子たちであり，学習室でポテトチップスの袋を開けてトランプを切っている子たちである。こうしていくつかの種類に分類もできるが，それぞれと話すと皆ふつうのひとりの人間だ。ますますわからなくなる。そもそも「学生を好き」とはどういうことなのか。

なんの確信ももてないまま観測を日々つづけるなかで，印象的な出来事があった。図書館に寄せられた，愛国報道の危険性を述べる図書の購入希望のメールである。テレビ番組では盲目的に日本を讃えているのを目にするが，実態にそぐわない空虚な自己礼賛は神話に過ぎないと学ぶべきである，というのが希望理由であった。こんな知見はとりわけインターネット上で散見されるが，そうでなくとも多くの人は気が付いている。もはやここは夢の国ではない。未来は必ずしも明るくなくて，我々は何を手にしても，何を選ばなくても，幸福の保証など得られない。私自身もそう感じる。学生も同じなのだ。そして，メールの差出人のように，厳しい現状を見つめること，将来への危機意識をもつことは，苦しいけれど前向きで，立派なことであるとも思う。

けれど，学生たちの頭に，もしそういう息苦しさばかりが呪いのように刻まれているのなら，それはなんだか嫌なことだという気がする。わざとお気楽なことを並べ立ててやりたくなるのである。今日までにいかに素晴らしい映画が生まれてきたか。長いこと鑑賞する術のなかった映画が，ついこの間ディスク化して出版されたこと。明日誰かが書き上げる文学がいつかノーベル賞を取るかもしれない。慶應のOPACだって大きく変わって，ずっと使いやすくなるんだよ（なりますように）。そんなことばかりを。

どうしてこんな気がしているのか自分でも知れない。学生のことが好きなのか，未だにわからないままである。もしかすると恐れてさえいるのかもしれない。それでも，無責任に学生に宣していたいのは，このようなことなのである。

「世界はだんだんよくなっている」